

中世ヨーロッパの楽譜



ごあいさつ

平成2(1990)年4月に開設された聖徳大学は、今年で10年目を迎えます。この4月には、人文学部に新たに音楽文化学科が設置されました。それらの記念として、聖徳大学が所蔵する中世ヨーロッパの装飾楽譜を展示いたします。

もともと音楽は宗教との密接な関係によって育まれてきたものです。中世のキリスト教社会においても、各地で独自の典礼(仏教では法要にあたる)が行われ、それに伴って典礼音楽が発達しました。なかでも、ローマ・カトリック教会で用いられたグレゴリオ聖歌は、やがてヨーロッパ全域に広まりました。

当時の典礼音楽は、詞に「ネウマ」と呼ばれる記号を付し、当初は音程を示す譜線は存在しませんでした。やがて四本の譜線を用いることが一般的となり、現在の楽譜と似た形となります。

現在伝えられている中世の楽譜には、緻密で色鮮やかな装飾の施されたものが多くみられます。当時の社会では、神の教えを記した聖書が人々の拠り所であり、聖書・聖歌を写すことは宗教活動の基盤ともなっていました。教会・修道院や大学では、書写を専門とする写字生がおかれ、豪華な写本を生み出すにいたりました。

時代が下がり、15世紀には活字の発明で知られるグーテンベルグにより活版印刷が広まると、こうした豪華な写本は姿を消しました。今に残るヨーロッパ中世の美の一端を、ご理解いただきたいと思います。

1999年4月27日

学校法人東京聖徳学園理事長
聖徳大学学長
聖徳大学短期大学部学長
学園長 川並弘昭

中世ヨーロッパの楽譜について

古代ギリシャ時代に登場した楽譜は、ギリシャ語歌詞の上に音高を示す文字や記号を添えるという形式であった。

9世紀になるとグレゴリオ聖歌が広まり、音を正確に伝える手段としてネウマと呼ばれる線状の符号が創出され、聖歌が楽譜としてあらわされるようになった。10～11世紀にはネウマに横線(楽譜)を添えて音程を明確にする試みがなされ、更に13世紀に入ると四角の音符ネウマ四線譜が付されて一般化した。それらは、鋳釘型ネウマを使い続けるドイツを除いて、全ヨーロッパで使用された。

しかし、リズムを表さないネウマ譜は不便となり、13世紀後半になると音の長短を音符の形状で表す定量記譜法が始まった。なお、これは声楽の譜法であり、楽器演奏用の奏法譜は別に存在した。そして、15世紀頃から用いられた鍵盤楽器用の記譜法が、今日最も国際的かつ普遍的な譜法とされている。

出品作品

1	ミサ典書	11世紀	フランス
2	昇階誦	13世紀	イタリア
3	交唱歌	13世紀	イタリア
4	昇階誦	13～14世紀	イタリア
5	ミサ典書	15世紀	イタリア
6	昇階誦	13～14世紀	イタリア
7	昇階誦	15世紀	イタリア
8	昇階誦	15～16世紀	スペイン
9	昇階誦	16世紀	イタリア

10	聖歌集	16世紀	スペイン
11	交唱歌	15世紀	フランス
12	昇階誦	18世紀	イタリア
13	昇階誦	16世紀	スペイン
14	譜線なしネウマ譜		
15	昇階誦	12世紀	ドイツ
16	ミサ典書	13世紀	フランス
17	交唱歌	13～14世紀	イタリア
18	昇階誦	14世紀	イタリア
19	昇階誦	15世紀	イタリア
20	昇階誦	15世紀	イタリア
21	交唱歌	15世紀	イタリア
22	昇階誦	15世紀	ドイツ
23	交唱歌	15世紀	フランス
24	交唱歌	15～16世紀	スペイン
25	聖歌集	16世紀	スペイン
26	昇階誦	16世紀	スペイン
27	聖歌集	16世紀	スペイン

期間中展示替えがございます。

用語解説

グレゴリア聖歌

中世以降、ローマ・カトリック教会で歌い継がれてきた単旋律聖歌の一般的な総称で、現在千数百曲確認されている。教皇グレゴリウス一世（在位540年頃～604年）が各地域ごとに歌われていた聖歌を集成したことに因み、この名前がついた。

交唱歌 (Antiphon)

ローマ・カトリックの教会暦（教会特有の暦で、キリストの主要な事跡を中心にしている）を通して毎日の聖務日課（毎日一定の時刻に一定の形式で捧げられる祈祷）の中で歌われる歌で、礼拝式の際に、詩篇の（前）後に左右の聖歌隊が交互に歌う。

入祭文（入祭文の項参照）を構成する三部のうちの一つ。

昇階誦 (Gradual: 1962年の第二ヴァチカン公会議以降は、「啓唱詩篇」と呼ばれる。)

ローマ・カトリックの教会暦を通してミサ（キリストの死と復活を記念する、ローマ・カトリック教会で最も大事な典礼儀式）中で歌われる歌。聖歌集に収められている。使徒書簡と福音書の朗読の間に司祭と聖歌隊が歌う。福音書朗読台に昇る時に歌われたのでこの名前がある。

トレーサリー

ゴシック式建築の窓・衝立・羽目仕切り等に施す装飾的はざまを意味するが、ここではそれに類する模様を指す。

入祭文 (Introitus)

ローマ・カトリックのミサ用語。主にその日のミサの趣旨を指す。交唱、詩篇唱（歌にした聖歌の詩篇）、栄唱（神を賛美する歌）の三部から成り立っている。

ネウマ

グレゴリオ聖歌等の記譜に用いられた中世の音符。旋律の動きや奏法等を図式的に記号化したもので、時代や地域により各種あり、現在の音符の原型。

フォルオ

写本（もしくは初期印刷本）に用いられた羊皮紙もしくは紙一葉を指す。伝統的に表面にのみ番号を付けてあり、従ってフォルオ10（表）、フォルオ10（裏）という表現をする。